

「みんな違ってみんな見えてる？」

越前町立越前中学校 二年 濱野結衣

私はバスで登校している。バス乗降の際、見守り隊のお婆さんが杖について、私たちが道路を横断するとき、優しく笑顔で「気をつけてね」と声をかけてくれる。母にそんな話をする、「それがユニバーサル社会の入り口かもね」と言った。ユニバーサル社会。社会科の授業で聞いたことはあったが、意味を深く考えたことはなかった。調べてみると「性別や年齢、障がいなどの有無にかかわらず、すべての人が暮らしやすい社会」と書かれていた。しかし、私はふと思った。「すべての人って、本当はみんなに見えてる？」

私は美術の授業が大好きだ。絵を描くことが得意で、クラスの友達や先生に「上手いね」と褒められることがある。でも、ある日、疑問がわいた。「目が見えない人は、どのように絵を楽しむのだろう？」と。

色、形、光、影。美術は視覚に頼ることが多い。だが、調べてみると、目が見えない人のための美術展があると知った。触って楽しむ絵や、音と香りで感じる作品、指

でなぞる詩の展示もある。私はとても感動した。「見えな
い人に合わせた美術」ではなく、「全ての人が一緒に楽し
める美術」になっていたのだ。しかし、私の学校にはそ
ういった取り組みはまだない。作品展も、すべて「見え
ること」が前提である。点字や音声の案内もない。そこ
で私は、機会があったら文化祭で「ユニバーサルデザイ
ンの美術展」をやってみたいと考えた。目を閉じて体験
できるコーナーや、音や香りで感じるアート。きっと絵
が苦手な子や、普段注目されない子の作品もみんなに伝
わるようになると思った。

ユニバーサル社会を作るためには、大きな制度や建物
だけでは足りない。それよりも大切なのは、ひとりひと
りの心の中にある「見えない壁」を無くすことだと思う。
「この人には分からないだろう」と決めつけたり、「関係
ないからいいや」と無関心になったりすることこそが、
人権を見えなくしてしまうものだと思う。違いがあるこ
とを知っていても、それを普通にするのは難しいのかも
しれない。だからこそ大切なのは、分からないから何も
しないではなく分からないから知ろうとすることだと思
う。点字を知らなくても、点字ブロックの上に立たない
ようにすることはできる。車椅子の人が困っていたら、

声をかけることもできる。たとえ完璧に理解できなくても、「その人の立場になって考える」ことは、誰にでもできるのではないだろうか。

私は、先天性の弱視を患っている。視力の成長期に、何らかの邪魔が入って正常な視力の成長が止まってしまい、眼鏡をかけてもよく見えない状態である病気だ。そのため、学校では常に一番前の席を先生にお願いしている。そのおかげで、私は毎日クラスのみんなと楽しい授業を受けることができる。本当にありがたいことだ。

人権とは、守られるものだけではなく、お互いに認め合うものだと思う。そしてユニバーサル社会は、一部の人のためではなく、すべての人が主役になれる社会であるべきだ。

毎日の登校でお世話になっているお婆さんの笑顔は、私の中に小さな種をまいた。その種は、気づきの芽を出し、今では私の行動の中に根を張っている。エレベーターを譲ったり、点字ブロックの上に立たないように意識したり、声をかける勇気を持ったり。小さなことでも、誰かの生きやすさに繋がっていると信じている。

私たちは、まだ見えていないものがたくさんある。しかし、だからこそ気づこうとすることができると信じている。見えな

いことに目を向け、聞こえない声に耳を澄まし、話されて
いない思いに心を寄せる。そんな社会を目指すことが、
これからの私たちの使命なのかもしれない。